

自己引用に向けられる厳しい目

—査読者が自分の論文が引用されるように仕向けていることが調査で判明—

By Dalmeet Singh Chawla, *Nature, News*, Vol. 573, pp.174-175, September 12, 2019.

Nature, Editorials, Vol. 573, pp.163-164, September 12, 2019.

自己引用の半強制的な誘導

大手学術出版社の Elsevier が同社の学術誌で査読を実施した 5 万 5 千の研究者を対象として、査読者の論文がどれほど査読をした論文に引用されているかを調査した結果を 9 月 6 日に公開した¹⁾。具体的には、査読を受ける論文における査読者の引用割合や査読プロセスを通じて査読者の論文が追加引用されたかどうかを調査している。結果として、著者らは 0.79%の査読で疑わしい事例が見つかったとしている。こうした査読者は一貫して査読した論文で引用を受けているようである。また、こうした査読者は自己引用の強要以外の出版倫理違反をしているようであり、この調査をきっかけとして彼らの論文のいくつかは撤回処分をうけるのではないかとされている。しかし、自己引用の強要を受けて出版されたいわば被害者論文については著者に責任は無いため撤回されないだろうとしている。

出版 / 引用ゲーム

こうした問題は何ら驚きではない。引用といった定量指標を用いた「ゲーム」は周知の事実だからだ。経済学の分野では、こうした指標を追うことが目的化してしまう現象をグッドハーツ則²⁾と呼んでいる。現在は自己引用のような不正に対する十分な対策がとられないまま指標だけが独り歩きしている。しかし、*Nature* のアンケートに答えた約 5000 人の読者のおよそ 10%は自己引用に対して対策を取る必要は無いとする。なぜなら、これは小さな問題であり、活発な研究者であれば自己引用をする研究者に対して自ずと悪い評価を下すだろうからである。最も要望が大きかったのは引用指標から自己引用を差し引くこと、あるいは、自己引用割合も同時に示されることであった。雑誌が自己引用に対するポリシーを制定すべきとの声も多かった。

これらの問題は、水道管路システム分野でも 2000 年序盤から既に示唆されていた。同分野の最大手学術誌である *Journal of Water Resources, Planning, and Management* (ASCE) の [Editorial](#) で先見に富んだ示唆が述べられている。この記事によると、2000 年から引用数や IF が永年雇用の指標として使われるようになったとしている。また、どのようにして「This game」に勝てるのかという戦略についてもかなり具体的に述べられている。この Editorial が公開されたのは 2001 年だが、既にゲームとして捉えられていたのである。

引用情報の公開を

現状、引用に関する多くのデータは公開されていない。2000 年以降、Crossref と呼ばれるプラットフォームに論文情報は登録され、DOI が付与されている。しかし、全ての出版社が参考文献リストの公開と分析に同意しているわけではなく、4800 万本の論文の 59%のみがデータを公開している。ただし、2 年前から I4OC と呼ばれるイニシアチブに賛同する雑誌が増え始め、Taylor and Francis, Wiley, Springer Nature などの雑誌が引用データの公開に賛同し始めたが、ACS や Elsevier, IEEE はまだ賛同していない。こうした取り組みが進めば出版における影の部分が見えるようになるだろう。

私の経験

自己引用の強要は筆者も経験がある。査読プロセスの中で〇〇という著者の論文の引用をすべきであるとの指摘を受けたことがあるが、それは私も以前にレビューしたことのある論文であったし、海外の二番煎じ論文であったため、敢えて引用を控えたものであった。しかし、査読は戦ったら負である。粛々と査読者の指摘に従い真摯に修正することが望ましい。第一、査読者の指摘に従わずに「... はダメな論文だから引用しない」なんて書いた日には査読者の心象を悪くしてしまい、他の回答が適切でも不採択を後押ししてしまう。論文の運命は査読者が握っているという関係が半ばこうした強制的な引用を後押ししてしまう。後日談ではあるが、この査読を担当した人がやはり自身の論文引用を査読プロセスの中で要求していたことが分かった³⁾。

こうしたアクションを食い止めるには、学会の査読要領での明記とプロセスにおける編集者の仲介が必要である。しかし、IF が雑誌の引用数に基づいている以上、査読プロセスにおける自己引用の誘導先（論文）が編集者の利害がある雑誌であればこれも十分に機能しないかもしれない。

脚注

- 1) Baas, Jeroen and Fennell, Catriona, When Peer Reviewers Go Rogue - Estimated Prevalence of Citation Manipulation by Reviewers Based on the Citation Patterns of 69,000 Reviewers (May 22, 2019). ISSI 2019, 2-5 September 2019, Rome, Italy <https://www.issi2019.org/>. Available at SSRN: <https://ssrn.com/abstract=3339568>
- 2) たとえば、社会福祉を計るために GDP を測り始めたら、人々は社会福祉を改善することなしになんとか GDP を上げようとし始めること、Google が被リンクの多いページを重要なページとし始めたら、人々は重要でないページの被リンクを増やし始めること etc.
- 3) 我々が知ろうとしたのではなく、ある機会で本人と話した際に私の論文の査読を担当したとべらべらと勝手に話してくれた構図である。

注意

1. 本稿の内容はすべて筆者の個人的見解に基づくものであって、筆者の所属組織とは無関係です。